

氷菓、

足任世。

氷菓、足任せ。

夏がようやく終わりを匂わせ、少し涼しさが顔を出し始めた平日の夜。

チープな退店音と、何度も繰り返され投げやりな「ありがとうございました」と共にコンビニを後にする。

特に目的なんてものは無かった。スーパーが開いていたらスーパーに行ったかもしれないし、時間によってはファストフード店でも良かった。でも、もしあるならば屋台が良かった。だがもう時刻は二十四時を少し過ぎた頃、迎えてくれるのはコンビニくらいのもだった。どこかいつもとは違った空気、季節の変わり目ゆえか普段出歩かない時間がゆえか、はたまた自分の何かが変わってしまったのか。わざわざ袋を頼むのも面倒で、むき出しのまま買ったアイスを開ける。

歩き食いなんて褒められた事ではないが、こんな夜更けに誰も見ちゃいないだろう。そんな事はどうだって良い。

溶ける前に食べてしまわなければ、食べたら家に帰ろう。そんな事を思いながら歩き出す。思えば最近は何も無いようで忙しかった。やはり季節の変わり目はやるべき事や出会い別れが重なる物で、気がつけば時間が溶けていってしまう。

こうして一人もの想いにふけるのはいつぶりだろうか。しかし今はそれが嘘のように穏やかだ。

つい食べるのを忘れていた。溶けたアイスが指をつたい垂れていく。

気を休めゆったりとした時間を過ごそうと、誰かと幸せな時を分かち合おうと、時間は過ぎてアイスは溶ける。だからどうしたと言うんだ。

一人だからかどうも思考が一人歩きしてしまう。当てどころなく彷徨う様はまるで今の自分のようにも思えた。

そんな事を考えているうちに最後の一口を食べ終える。残念、あたりの文字は書いていなかったな。

気づけば手が汚れてしまった、もう家に帰ろう。

はずれの棒切れをプラプラと持ちながら歩くいつもの帰り道はやはりいつも通りで、でもいつもとはどこか違った。辿り着く、見慣れた家だ。そこに違和感なんて物は無く、紛れもない日常である。それもそうだ、ほんの十分程度の非日常は、気まぐれの足任せは終わったのだから。